

持病に効く薬があるから、と甘い誘惑にのることになった。しかし、なんとかいう長い名前の注射は副作用があるから、10日間入院観察しなければならぬ、といわれて入院することになった。副作用とは、発疹、嘔吐、疼痛、不眠、鬱、発熱、倦怠、など10個ぐらいの説明を受けたが、さいわいにも発熱だけで、それも処方された熱冷ましを飲むと解消されたので、これという副作用はなかった。まあ、甘い誘惑が功を奏するかどうかはこれからの楽しみではあるが。もともとフィフティフィフティぐらいの可能性だそうだから、ほとんど神頼みに近いものだが、ほくのような日ごろの行いの悪い人間は「神様」が味方してくれそうもない。「吉報来たらず」で終わってしまいそうな気がする。

発熱という副作用は出たが、それでも、38度、38・5度などという高熱は初めてだったので、妙に楽しかったし、ハイテンションになって、持ち込んでいたパソコンでハイテンションな原稿を書くことができて、それはそれなりに楽しく、原稿を書いている間はただ熱冷ましを飲まないようにしていた。(もともとそんなハイテンションで書いた原稿は後で読みかえずと論理的に破綻を呈していて、苦笑しながら、50枚ぐらい没にしてしまったのだが)

入院にあたって何冊かの新書を持ち込んでいたのだが、そのなかの一冊で、五木寛之が終戦時はヒロポン中毒の作家がたくなんといてハイテンションな時代だった、と対談で語っていたが、なんとなくわかるような気がした。

戦争の時代という鬱の瘡から逃れようとハイテンションな気分を求めたのだろうし、戦争が終わってから日本は高度経済成長政権にとって一番都合なのは、国民が立ち止まることなく、経済という餌を前に歩きつづけてくれることだろう。思想的に豊かになった、よりも、経済的に豊かになった、のほうが実利的なのだろう。生活の豊かさを実感できるのだろう。

鬱のことをもうすこし書けば、精神医学の世界は世界各国で判断基準がバラバラで、日本で鬱病と判断してもフランスでは鬱病ではなかったし、そもそも精神科医個々の能力や経験に頼る部分があったのでグローバル・スタンダードをつくらうということ、1980年代にアメリカでつくられた「DSM」診断というのが日本に入ってきて、日本でもその基準を使用しているそうである。いまは第五版だそう。

それは鬱の背景を一切問うことなく、失業して鬱になった人も、脳に問題があって鬱になった人も、貧困など社会的要因で鬱になった人も、その症状が2週間以上つづけば鬱病にする、といった非常に単純な判定基準を用いているそう。失恋して2週間落ち込んでいたら鬱病と判定されるそうである。

たとえば、仕事に行きたくない、とおもうのは誰にもあるものだが、その鬱な気分が2週間つづけば鬱病だそう。鬱な気分と鬱病、結局その判断は現場の医師に委ねられることになるだろうが、そうなると、精神科医の能力や経験に頼る部分をなくし、精神医学を科学的な分野に位置づかせようとした試みたものの、最終的には精神科医個人の力量に頼るといふ昔ながらの精神医学に戻っていくのではないかとおもう。鬱のグローバル基準、そんなものがまかりとおっている世の中はなんだかうつつしいとおもうのはばくだけだろうか。鬱はもつとフア

長期という名の躁の時代を生きてきた。質的な誠実さよりも、物量的な虚構にのめり込んでいった20年だった。

80年代後半から90年代初めにかけてはバブル景気というなにかもハイテンションで、金で解決できないことはない、そんな風潮の時代をほくらは生きてきた。もつともほくらは金には縁がなかったので金で他人の面など張ったことは一度もなかったが。

それがバブルの崩壊とともに平成の時代に入って、時代は鬱を生きることになった。経済がかつてのように膨張することはなく、なにかも物的富と交換できるような時代ではなく、成長がなくてもなんとかがやりくりして生きていく、物的過剰よりも知的安定を求めている、そんな鬱の時代をほくらは生きていけるとおもっていたのにそれをまた安倍某は躁の時代へ逆戻りさせようとしている。経済がよくなればすべてよし、給料が上れば国民の不満は解消される、みたいな短絡的な発想で日本という国を動かそうとしている。少子化や人口減少で働き手が少なくなるといえば、外国人を雇用すればいい、とか、不足するものは補っていいこうという発想が強い。不足するものがあれば不足したままで、たとえば後何十年後には日本の人口が三千万人ぐらい少なくなるそうだが、少なくなったら少なくとも少なくて、その少数の時代を生きる知恵を見いだせばいいとおもわないのだろうか。

躁の時代、ハイテンションな時代は、物事を深く考えることをストップしてしまう。立ち止まって考えていると後ろから来た奴に追い越される、水戸黄門の唄にもそのような一節があったが、追い越されて泣くのが嫌ならなにも考えずに歩け、と。

ジー、曖昧であるほうがいい。

そんな精神科医のひとり香山リカがなにかの本で、映画『ALWAYS 三丁目の夕陽』をとりあげていて、昭和三十年代がブームになって「あの頃はよかった」とみんなが懐かしんでいるが、あれはノスタルジーという病で、実際に、あの人たちが昭和三十年代の暮らしにいきなり戻されても、いい歳して家に水洗じゃないトイレがあっても困るだけだろうに、というようなことを言っていたが、リカちゃん、それは違うぞ、とこの年寄りはおもったものだった。トイレが水洗でなく、ポットン便所でも、エアコンがなく扇風機だけとしても、冷蔵庫が氷冷蔵庫だったとしても、どっこいこの年寄りは生きていけるぞ。生きていけないのは昭和35年に生まれたアンタのように、明日という未来は今日よりも確実によくなっている、努力すれば手に入らない物はない、そんなことを学校で教わってきたアンタたち世代の弱みではないのか。確かに昭和三十年代は、ほくら年寄りにとってはノスタルジーをかきたてる時代だが、いまさらタイムスリップすることもできない。そのことをみんなわかったうえでノスタルジーを楽しんでいるんだ。水洗トイレがなくても、エアコンがなくても生きていけるぞ、リカちゃん。ついつい苦笑したことがあった。

ヒロポンではないが、いまも昔も歌手の中には音がキレイに聞こえるとか言って大麻を吸引している人がいて、ときどき摘発されているが、あれもハイテンションになって、非日常的感覚がその音楽性を引き出しているのだろう。警察に捕まった歌

手はみんな、ファンのみなさんやスタッフに謝罪しているが、大麻吸引が犯罪であることを知っていて確信的にやっていたならなぜ謝罪するんだろう。逮捕されたことで仕事がキャンセルになり困るスタッフも出てくることはそうだろうし、ファンはファンで街頭インタビューやらで「大麻をやっていたなんて裏切られた気分がします」なんてみように潔癖性をちらつかせてみたりしているが（「大麻なんて別にかまんじゃないの」なんて意見は編集でカットされているだろう）、この世のなかそんなにきれいごとばかりではないし、生きていくとそれなりのリスクは織り込み済みだろうに。なにもかもが予定調和的に運ぶとは限らない。仕事が急になくなることはあるし、誰かに裏切られるということなんかそんなに珍しいことではない。

話を入院時にもどすと、入院にさいしては、書かなければならない原稿や、読まなければならぬ本がたくさんあったので、入院を機に片付けてしまおうと個室を頼んでおいたのだが、空きがないということで四人部屋に入った。先住人がふたり、北向きの窓側にいて、ぼくと、一緒に入院した60歳ぐらいの男性は廊下側の部屋。

狭い。ともかく狭い。ベッドとテーブル、TVと冷蔵庫、物入れ、それらで身動きが取れない狭さで、なおかつカーテンを張り巡らせているので、よけい窮屈に感じてしまう。こんな窮屈な部屋に閉じこめられて10日もいるとよけい病状が悪化しそうな、そんなストレスを感じさせる病室だった。効率よくつくっているつもりだろうが、病人には無駄なスペースというくつろぎも必要ではないだろうか。そしてまた、ベッドに横にな

い夜になるだろうな、と眠れないことを覚悟したときだった、イビキの男性の隣で寝ている男性、ずっとカーテンで仕切っているから年齢は分からなかったが、あくる朝、看護婦さんと孫の話をしていたからぼくぐらいの年齢なのだろう、その男性が叫んだ。「うるさい」「静かにしろ」「口を閉じて寝ろ」。しかしイビキ男は反応がなくイビキがやまない。何度か怒鳴り散らしていたが、そのうち、ドン、という音がした。たぶんベッドを蹴ったのだろう。するとそれに反応して、無意識なのか、目が覚めたのかわからないがイビキがとまった。が、それもつかの間、ふたたびイビキである。

カーテン一枚で仕切られている横で地響きのようなイビキをかかれたら頭のなかが壊れそうになるかもしれない、とすこしは怒鳴り男に同情したが、その夜はずうっと、イビキがはじまると同時に怒鳴りはじめてベッドを蹴って、とその繰り返しだった。

ここは看護婦さんに相談して、無い知恵を絞り出す方を選択すべきではないかな、とおもって、イビキと怒鳴り声を交互に聞いていた。結局その夜はイビキと怒鳴り声の二重奏でほとんど眠れなかった。

とはいっても、深夜、看護婦さんが何回か巡回してくる。そのときにこのイビキに気づいてくれたら、と淡い期待を持ったが、看護婦さんが巡回してきたときにかぎってイビキ男のイビキは一休止中で、看護婦さんにはこの部屋のバトルが分からなかった。本来なら怒鳴り男が、看護婦さんが巡回してきたとき、イビキ男のことを相談したら、病院には病院なりの対応というものがあった、すこしは緩和されたかもしれないが、怒鳴

ると、隣のベッドとはカーテン一枚で仕切られているだけで、隣の人の息づかいが聞こえてくる。寝返りを打つとその動きが直接伝わってくる。まるでダブルベッドの真ん中をカーテンで仕切っているみたいだった。

これでは原稿は書けない、と少々困った。

18年ほど前、高知医大附属病院へ入院したことがあって、そのときも四人部屋だったが、ちよっとおかげさな印象をいえば、医大のほうが1・5倍ぐらいの広さだったような気がする。ベッドとベッドの位置もゆとりがあつて、隣の気配が感じられるということとはなかったし、それに診察や夜寝るときなどはカーテンを閉めていたが、それ以外、日中にはずうっとカーテンを開け放していたので広々とした印象だった。

その時もパソコンを持ち込んで原稿を書いていたが、隣の人が気にかかるというようなことはなかった。それだけベッドとベッドの間にゆとりがあつた気がする。

とはいっても、個室が空いていない以上我慢するしかない、と諦めた。が、我慢するところはそこではなかった。

その夜、消灯は九時だが、九時を過ぎてすぐ、一緒に入院してきた男性がものすごいイビキをかきはじめた。尋常ではないイビキである。病的なといった形容があてはまりそうなイビキである。これは困った。明日は副作用の強い注射をしなければならぬのに眠れなかったらしんどいなあ、しかしまあ、それでも、集団生活だからある程度は我慢すべきところは我慢すべきだろうが、なにせ初めての体験だからどこまで我慢すればいいのかわからないなあ、などとイライラしながらも、今夜は辛

り男は看護婦さんに訴えることをせず、イビキがはじまると怒鳴り散らしてベッドを蹴っていた。

ぼくの隣のカーテン一枚の向こうの男性は寝返りを打ったり、ため息をついたりしていたが、ときどき軽いイビキが聞こえてきたのですこしは眠ったようだった。まあ、イビキ男もずうっとイビキをかいているわけではなく、ときどきイビキ休みはあるのだが、うとうととしてもすぐにイビキがはじまり目が覚めてしまつて、満足な睡眠は取れなかった。気分としては一睡もしていない、そんな感じで朝を迎えた。

夜中じゅうのイビキには参つたが、まあ、これほどのイビキは病的なものだろうから自分でも自覚しているだろうし、奥さんからも注意されているだろうから、ひと言、同室者に「イビキがうるさいかもしれないが」と断りの挨拶をいれておけばよかったのに、などとおもつたりしたが、ぐっすり眠ったのか朝からイビキ男は元気だった。昨夜の怒鳴り男のクレームはたぶん気がついてはいるはずだから、ここはひとつ挨拶でもあるのかとおもっていたが、そんな素振りはなく、怒鳴り男にしても、イビキ男に直接クレームを入れるというようなこともない朝だった。

イビキ男の同室者への配慮のなさもすこしはむかついていたが、怒鳴り男の性格の悪さにはもつと慥然とした。

朝、看護婦さんが巡回してきて検温などをするのは6時半頃だったが、6時半に起きた怒鳴り男はさっそくTVをつけた。なぜTVをつけたのがわかったかというイヤホンをつけていなかったからだ。で、なにがおかしいのかゲラゲラ笑いだし

た。あっ、こは、イビキ男は「うるさい」「イヤホーンつけろ」と怒鳴るところではないか、とおもったがそうはならなかった。怒鳴り男には自分のTVの音や笑い声は気にならないのだろう。それに本来はTVどころではなく、怒鳴り男からイビキ男にクレームのひとつでも言うべきところだろうが、TVを見て笑っているだけだ。イビキ男はぐっすり寝ただろうが、怒鳴り男はほとんど寝てないはずである。それで看護婦さんがやって来てもイビキ男には触れない。イビキに怒鳴り散らしていたことなどおくびにも出さない。一晩中、あれほど怒鳴り散らしたのだ、事情を説明し、善処を求めるべきではないのかとはおもったのだが、そうはならなかった。今夜も怒鳴り散らせばいいとおもっているのだろうか。

それにもっと不愉快だったのは、怒鳴り男は看護婦さんや食事の配膳係のおばさんには猫なで声のような声を出して好々爺を装っていた。「ありがとよ、ありがとよ」「そうよ、これが孫よ」などと、気持ちの悪い声をずっとだしていた。昨夜のあの怒鳴り声はなんなんだ、と慥然とした。こういう男は大嫌いだある。

高知医大にも自分勝手な男はいた。

医大に入院したとき、ぼくの隣とその前の男性は70歳から80歳ぐらいの人で、ぼくの前には若い人がいた。その若い人が退院して会社社長とかいう50代ぐらいの男性が入ってきた。

ちょうど大相撲の時期で、ぼくの斜め前の80歳ぐらいの男性のところには昼からその奥さんがやって来て、NHKの大相撲中継がはじまったらふたり仲良く見ていた。入院中の楽しみで

ある。

TVはイヤホーンをする、というのが規則は規則だが、イヤホーンをしては夫婦で臨場感が楽しめない。音は細く絞って、イヤホーンなしで大相撲中継を見ていた。ほくもふくめその部屋の人たちはそれはそれで暗黙のうちに了解していた。夫婦仲むつまじく相撲中継を楽しんでいるならそれはそれでいいではないか、と。3時半から6時までのことではないか、と。

ところが社長が入ってきた瞬間、「うるさい、イヤホーンで聞かんか」と怒鳴った。むっときて、つい「相撲の時間だけですからいいじゃないですか」と言ってみたがダメだった。だからしかたなく老夫婦は音を消して、音のない相撲中継をふたりで見ることになった。音のない大相撲中継がどれほど味気ないものか、そうかといったらどちらか片方だけがイヤホーンをするのも味気ないものである。

そのころは携帯電話がそんなに普及していない時代だったが、社長はベッドの上から、会社への指示や、取引先との連絡など頻繁に携帯を使っていた。自分が入院などして仕事に差し障りがでては困るとおもったのだろう、頻繁に携帯で指示をしていた。見かねた看護婦さんが、病室内は携帯禁止なので外でかけるように、と言うと、はいはいはい、と軽い返事をして、看護婦さんがいなくなると平気で携帯をしまくっていた。バカたれとおもった。

極めつけは、どういう事情があったかはわからないが、この部屋に新しい患者さんを入れたので、ほかの病室に引越してほしい、と看護婦さんが社長に頼んだことがあった。「嫌」と拒んでいた。婦長さんが出てきて、いろいろ事情を説明して

いたようだったが「嫌」の一点張りで、社長は居すわってしまつた。この部屋が気に入っているというのではなく、ただ、移動してくれということに素直に従いたくなかつたんだらうとおも

う。あの社長の会社の従業員の不幸をおもったことだった。

今夜はどうしよう、とおもった。耳栓や睡眠薬ではイビキと怒鳴り声の二重奏には勝てないだろう。こは婦長さんに相談してイビキをなんとかして緩和してもらうしかないかなあ、でもあのイビキを緩和できる妙薬があるのだろうか、それとも病院はとつともなく優良な特効薬を隠し持っているのだろうか、などとおもっていると、10時ごろ、看護婦さんがやって来て「個室が空きました」と言われた。喜んで前線逃亡である。やっと原稿が書けるとホッとした。

声のおおきい人はどこにでもいるし、そんな人に限って、自分の味方だとおもえる人には猫なで声をだして、いい顔を見せる。お気に入りだけ集めて、いいことしか聞かなくなる。耳の痛いことを言う人は排斥する。

最近の安倍某がそのような悪循環に陥っている。ニュース番組なんかを見ていると、自分の迷惑通りに進まないといすぐイライラして強引な軌道修正を強要してみたり、国会なんかでも品のないヤジを飛ばしていたりしているようだ。そして、自分のイエスマンを党やNHKや日銀、いろんな審議会の中核に置いて、ご機嫌を取ってもらって喜んでいる。気持ちのいいことだらう。『日本を、取り戻す。』というキャッチコピーのもと、「俺は日本のリーダーだ」と喜々としている。前回の首相時るとき

のような鬱のような状態はみじんも感じられない。耳の痛い話は聞かないと決めたようだ。

とはいももの、『日本を、取り戻す。』というコピーはいいコピーだとおもう。たぶん、電通かどっかの大手の広告代理店の売れっ子のコピーライターたちがつくったものだろうが、キャッチコピーは壮大な理想を掲げているように見えて、実体はなにもない、なにも言っていない、そういうコピーがいいコピーだが、その点ではこの『日本を、取り戻す。』というコピーはいいコピーだ。日本は誰にも奪われていない、なんて勘違いする人もいるかもしれないし、いやいや、日本はすでに周辺国に奪われているではないか、と憤る人もいるだろう。でもこのコピーは実はなにも言っていないのだ。

そもそもここという「日本」とは、三菱重工ビルを爆破した大道寺将司が思い描いていた日本なのか、それとも、自衛隊に決起を促して自決した三島由紀夫が思い描いていた日本なのか。「取り戻す」とは誰の手から取り戻すのか、なにも語られていない。

いやいや安倍某が言うのだからそれらは自明だ、と先入観を持って主張する人もいるかもしれないが、それは安倍某の戦略にはまってしまふ。こはひとつ、「安倍某の思い描いている日本を、安倍某から取り戻す(取り戻して破棄する)」と読み替えてみる手もある。

それにこのコピーを書いたコピーライターたちはどのような日本を思い描いていたのだろう。それを聞きたい気もする。たぶん漫画世代である彼らはどんな日本を思い描いているのだろう。安倍某のように攻撃的な日本であってほしいとは思っていない。

ないような気がする。どちらかという和外向きになにかを発信するのではなく、内向きに壊れやすい自我を抱卵している姿が浮かんできてしまうのだが。

いまの日本の若者は直截的な言葉の遣り取りではなく、LINEやSNSというような機能を利用しての間接的な遣り取りで、自分の本音、相手の本音、そんなものの交換に臆病になっている。自分は傷つきたくないが、嫌いなやつは傷つけたい、そんな自己抱卵的若者がふえているようにおもふ。いや、若者だけではない。安倍某もその仲間だ。

安倍某が思い描いている日本の一つに、愛国心を大事にする日本、というのがあるみたいで、そこには、天皇（＝神）を中心とする日本、という幻想があるみたいだ。

聖書の創世記は、神が光あれと言ったら光があった、と神の權威、威光を合理的な表現で書きあらわしていて、味も素っ気もない文章だが、日本の国産みの記は、最初は水蛭子、つぎはアハシマと不遇な子が生まれて、海に流した、と日本の国の最初は生と死、神聖と穢れ、が共存する神の權威も威光もない神の姿があるだけで、それも、女神のほうから男神にセックスを求めたから不遇な子が生まれて、その反省のもと男神からセックスを求めたら清浄な国産みができたらしいので、日本の成り立ちは最初から男尊女卑を旨とすべし、という思惑で成り立っている。

だからだろう、きつと、そんな成り立ちの日本を安倍某は愛し、国土と文化を守らなければならないと言っている。まあ、国土は昔から取った者勝ちという側面もあるし、文化だって何

千年も同じ状態がつづいたのではない、水の流れと同じで刻々変化しているものである。未来永劫変化のないものはない。国土や文化は死守すべきものだろうか。

そうはいっても、いま現在、日本という国土で暮らしている人がいて、脈々とつづいている文化がある。ほくもまた、日本の底流に流れている文化や伝統に育まれてこの歳まで生きてきた。たつぷりと、日本的なるものに染まっている。人が生きているということは、意識するしない、にかかわらず、その国の文化や伝統と共に生きていることだろう。それは非常に個人的なもの、ひと一人ひとりが文化や伝統を愛したり、邪魔におもったり、面倒くさくおもったり、ときには見直してみたりして、個々人の中で濃淡、緩急自在に意識されるものだとおもふ。「お上」から、国を愛せよ文化を愛せよ、と言われる筋合いのものではないとおもふ。この日本という国で生きている一人ひとりがそれぞれのやり方で、国を愛したり嫌ったり、文化や伝統を尊敬したり無視したり、とそれぞれのスタンスで生きていくのが正常で、一律的に「愛すること」を強要されても、愛せない人は愛せないのだ。だからといってその人たちがこの国で暮らす権利はない、などと無茶なことは言えない。

世間というものは理想も善意も悪意も毒気も、清濁併せて飲み込むことで生きながらえてきたのだから。